



さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和7年1月31日 第12号

学校教育目標 心身ともに健やかで主体的に生きる子どもの育成

・たがいに努める子（やる気） ・たがいにきたえる子（元気） ・たがいに手をとる子（勇氣）

校歌

井上 雅史

今回は宮原小の歴史を少し振り返り、宮原小について理解を深めてみたいと思います。

先月号で目的や目標のことについてお話ししましたが、本校の学校教育目標は「たがいに努める子 たがいにきたえる子 たがいに手を取る子」です。この三つの言葉を学校教育目標として定めたのは昭和54年(1979年)のことでした。そこから45年この言葉は受け継がれてきています。

そんなに長い間目標を変えないのかと思われるかもしれませんが、学校教育目標は、学校の課題や社会の状況等、その時々に合わせて変えることを検討すべきものです。そのうえで、私はこの言葉は今後も大切にしていきたいと思っています。

その理由の一つは、この言葉が校歌に「たがいに努める」「たがいにきたえる」「たがいに手を取る」と歌われていて、宮原小学校に関わる全ての人々が共有している言葉だからです。

宮原小学校の校歌は昭和28年5月30日開校80周年記念に当たり制定されました。その時の様子について、当時の第四代PTA会長(昭和27・28年度)の清水貞一氏が100周年記念誌に寄稿されています。

～前略～

校長は松沢先生(第30代校長松沢周輔先生 昭和26年4月～昭和31年3月在職)の時である。宮原小学校にはまだ校歌がないので一般募集でもしてみてもどうかという相談を受けた。私は応募した中にいいのがある事は少い、永久に残すような校歌ならば権威ある人に作詞も作曲も頼んだものでなければ、いつの間にか歌はなくなって、また別に作る様な事になるのではないかと考えた。それには金もかかるがやむを得ない、何とか工面もできるだろうということになり役員会に諮ったが異論はなかった。相談の結果、神保光太郎先生に作詞を依頼した。先生は構想を練る為に来校されバスから降りて校門の所に来た時にしめたと思った。それは入り口に大きなせんだんが聳(そび)えていたからであったと後日お話になった。

作詞ができてから次は作曲である。松沢先生は童謡の大家である佐々木先生ならいいんだがと言われてどうしたらよいか思案していたところ、有難い事に神保先生が連絡してあげましようと言う事であったので、佐々木先生の先生と決めた。そこで私と松沢校長と音楽を担当していた砂田(すがた)先生三人で佐々木先生の疎開先の住居を尋ねて御依頼を申し出たところ、心よく引き受けて、いい詩が出来ているからいい作曲もできるでしょうとつけ加えた。

やがて作曲も出来上がると先生がそれを持って御来校になって、上級生を集めて自らピアノを弾いて指導してくれた。佐々木先生は演歌の方が儲かるけれども童謡や校歌は歴史に残ると言われた。また、神保先生の作詞には冒頭にも「みやはら みやはら」とあってなんとか生かしたかったが、作曲上やむをえないとのことで、カットされたそうである。幸いにして皆さんが非常に校歌に親しんでいたとの事で私もうれしい。

いろいろな人が努力し、子どもたちのために永遠に残るよいものを作ろうと多くの人々が力を合わせて作られた校歌です。そして校歌を通して宮原小の目指す子どもの姿を多くの人々が共有しています。これは今後ずっと大事にしていくべき言葉なのではないでしょうか。

将来、学校教育目標は変更するかもしれませんが、しかし何らかの形で宮原小が大切にしている子どもの姿を示すこの言葉は大事に大事に残していけたらと思っています。